

駿河台大学学生のための教科書作成の検討 平成 30 年度教育研究センター プロジェクト経過報告

中 川 洋 子 Todd RUCYNSKI

I. プロジェクトの目的

本研究プロジェクトは、本学の学生の英語力向上に効果的な本学オリジナルの教科書作成を目指し、クラス分け試験や英語教員のアンケート等の分析を通じて本学の英語教育の課題を明らかにするものである。

入学時のクラス分け試験のデータからも明らかのように、本学学生の中には、高校の学習指導要領で目標とされる英検準 2 級程度 ~2 級程度の英語力が不足している者が少なくない。したがって、リメディアル教育をどのように進めていくべきかということが重要な課題となっている。本プロジェクトでは、まずクラス分け試験や教員アンケートで学生の学習状況を把握し、理解度が不十分な分野を分析することで、本学では具体的に何に重点を置いた学生指導が必要なのかを明らかにした。また、他大学で使用されている教科書にも目配りし、その内容を調査し、本学の学生のニーズに合わせた教材作成に向けた検討を行った。

次年度は、今年度の研究成果を活かし、実際に教科書を作成していく予定である。英語 I と英語 II を関連づけ、映像を活用した実践的な場面等を盛り込み、就職活動や留学準備など、学生のニーズに配慮した教科書作成につなげたい。

II. クラス分け試験 (ACE) の分析

本学では、2017 年度より新入生のクラス分け試験として、英語プレイスメントテスト (以下、ACE と呼ぶ) を利用している。ACE とは、学習指導要領に対応した内容を出題し、高校までの英語教育を修了している新入生の英語力を的確に測定することを目的とした TOEIC 形式の英語力試験である。英語運用能力評価協会 (ELPA)¹⁾ が開発、実施している

300 点満点の試験で、レベルは英検 3 級 ~2 級、TOEIC テスト 300 点台 ~700 点程度である。本学学生の多くがこのレベルに相当し、英語力のより詳細な測定が可能であると考えられる。出題される問題の内訳は以下のように、リスニング、語彙と文法、リーディングの 3 部構成となっている。

分野	設問数	配点
リスニング	14	100
語彙・文法	30	100
リーディング	16	100
合計	60	300

また、本学では毎年同じ試験問題を使用するため、新入生の英語力の経年比較も可能となり、各学年に対応した指導に活用されている。

2018 年 4 月の実施状況は、受験者は 1064 名で、結果について学部による大きな差異は認められなかった。しかし、設問によって誤答率が高いもの、半分以上の学生が正答しているものなど、学生間にある程度同様の回答状況が認められた。つまり、学生の多くに共通する、比較的理解度が十分な分野や苦手とする分野があり、そこを明らかにして対策を行うことで、学生の英語力向上と補強が可能であると考えられる。毎年同じ問題を使用するため、具体的な設問の分析結果の提示は控えるが、概要を以下のように述べておく。

(1) リスニング

リスニングは、短い文章の方が正答率は比較的高いが、短くても否定の疑問文で問われているもの(例: Do you know this story? → Don't you know this story?), 様々な選択肢や名詞が提示され、情報が変化する文(例: I want to buy an umbrella, a raincoat for my

son and a rain boot for my daughter. Oh, I also have to buy one more raincoat for my daughter.)の聞き取りの設問では、かなり正答率が低かった。これは、語彙不足と、否定疑問文を使用する訓練の不足、まとまった文章の聞き取りに慣れていないため、情報処理が間に合わないなどの原因が考えられる。

(2) 語彙・文法

前置詞の意味は比較的理解できているようだが、副詞の意味と用法の設問は正答率が特に低かった。語彙不足と品詞の正しい使い方が理解できていないことが考えられるため、品詞の意味と用法を復習することが必要であろう。また、練習方法も空所補充や与えられた語句を文法的に並べ替えるだけではなく、基本構文を応用して自分の語彙や内容で組み立てる英作文や口頭練習で、体験的なアウトプットを行う訓練が求められよう。

(3) 読解

語彙不足と、まとまった文章を読むことに慣れていない様子が認められる。しかし英文が長いと正答率が低いということではなく、英文がさほど多くなくても、たとえば商品の宣伝広告や旅行の情報など、受験者に伝えるメッセージを読み取らねばならない設問は、比較的正答率が低かった。一方、文章の量が多くてもストーリー性のある文脈だと理解しやすいと考えられ、正答率が高かった。

なお、読解問題は後半になるほど英文の量も増えるが、少々長くてもまとまった文章の設問は正答率が比較的高く、複数の文章を読んで解答する設問の正答率はやや低かった。

Ⅲ. 英語教員のアンケート結果から一本学はどのような英語教育を目指すのか

昨年の春学期末に、英語 IA、英語 IIIA 担当教員にアンケートを実施した。その結果から、授業や学生指導について様々な工夫や、本学ならではの課題等が明らかになった。アンケートの内容は以下の通りである（一部を抜粋）。

3.1 英語 IA

設問 1：春学期の授業で、何らかの問題がありましたか。あった場合は、具体的に説明して頂けますか。また、問題があった場合、どのように対処しましたか？

- ・特にありません。
- ・特に問題なく、順調に経過しています。
- ・昨年度より出席率がよく、今のところ特に問題ははありません。
- ・特にありません。基礎的な英語力がないのは想定内なので手を替え品を替え、繰り返し学習を行っています。
- ・特段の問題はありません。

設問 2：授業で工夫されている授業方法や成功例などがございましたらご紹介ください。

- ・学生が授業に飽きないように、読解、聴解、会話を取り込むことによって、内容に多様性を持たせている。
- ・おだてる、ほめる。
- ・クラス全員の名札を毎年作っています。授業であてる場合は、必ず名前を呼ぶようにしています。
- ・出席している学生には必ず名札をつけてもらい、名札が残った学生が「欠席」として名前を読み上げています。
- ・テキストに沿ったパワーポイント資料を準備して、説明を行っています。
- ・下位レベルのクラスでは特に、色々な作業をさせながら授業を進めることで授業に集中させる、また説明を聞いて、要点をしっかりと理解していれば、高得点が確実に取れるような課題を用意し、聞く姿勢を徹底させて、理解度に繋がるよう心掛けています。
- ・英検や TOEIC などの英語試験を受験した場合には、合格・不合格/点数に関わらず、加点対象にするので、証明書をもってくるように伝える（昨年度は、2クラスで一人ずつの受験者がいた）。
- ・授業中に、金星堂から発行されているテキストを使っております。そのうち数点に Check Link というシステムがあり、教員が学生の入力する解答をリアルタイムで見ることができます。学生にとって難

しい質問をその場で知り、アドバイスできるという点で、このシステムは便利だと思います（他にも利点がありますが）。また入力スマートフォンで行うというやり方は、学生には手書きより身近かもしれません。手書きだった時よりも回答が多いように思います。

- ・単調にならないようにリスニングの穴埋め問題、あらすじ問題を毎週与えて、優秀者には授賞発表をしています。
- ・受け身にならないように、身の回りのことを主体的に毎週日記に書かせています。授業で聞いたことをノートにまとめて、それをコピーしたものを毎週提出させているので（評価にノート点を入れて重視することを伝えてある）まったく授業を聞かないという学生はいない。

3.2 英語 IIIA

設問 1：今年度からコース別クラスを開講しておりますが、授業や学生対応等で何かお気づきの点がございましたら、お答えください。

- ・スポーツ関連の英語の方が、日常英語や標準英語に比べると難しい場合があるので、かえって学習意欲が低くなっている学生もいる。
- ・「スポーツ英語」では、日大アメフト事件など、タイムリーな話題を教材にすることができました。
- ・どのようにして授業に参加してもらえばよいか悩むところであるが、授業中に取り組んだプリントを毎回提出させるなど、何らかの作業をさせて英語に触れるようにしている。また、日大アメフト事件やバスケットボールの留学生の審判への暴力事件の英文の記事を取り上げ、自分がその学校関係者、監督や指導者などの立場なら、どのような対策を講じるかなどについて、意見をまとめて提出させた。英文の記事は読めなくても背景知識があったため、学生にさほどの負担はなかった様子であった。
- ・英語 I は、レベル別に分かれているので、教えやすいが、英語 III は、A から D までの学生が混ざっているため、非常に教えるのが難しい。レベルの間に合わせるしかない。そこで、上のレベルの学生は時間を持って余し、下のレベルの学生は、時間が十分でな

い状況になる。また、学生は、本当に選んだコースを勉強したくて受講しているのかよくわからない。次年度からは、レベル別にできるように、コース数を減らしても良いかもしれない。

3.3 考察

以上のアンケート結果から、各担当教員が学生の動機付けを高め、英語力を身につけさせるために様々な工夫を凝らしていることがわかる。授業中に問題演習を行い、授業後は課題を提出させるなど、学生の集中力を持続するための手段を講じている。本学の英語教育では、英語を苦手とする学生の苦手意識払拭、学習方法の確立、学習の動機付けを高める等の指導が必要とされている。さらに効果的な英語力向上を目指すためには、各授業で、具体的にどのような英語力を身につけるべきかという目標を明確にし、教員と学生が一つ一つの授業で成果を視覚化しながら授業を進めることも必要ではないか。

一般に英語は、4 技能をバランス良く修得することが良いとされている。しかし、週に 1 回や 2 回しか授業がないことや、自学自習が不足している状況では、4 技能の修得は難しい。また、国内では英語の能力がペーパーテスト（授業内の筆記テストや TOEIC、英検等の資格試験）で評価されることが多く、スピーキングやリスニング、ライティングなどのアウトプット力の養成が不足していること、試験で評価されることで常に正確な英語力が要求されるなど、個人が間違いを恐れずコミュニケーションに臨むというような積極的な姿勢を育てるのは容易ではない。

1990 年代後半以降、ヨーロッパ全体で外国語の学習者の修得状況を示す際に用いられるガイドラインのヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) では、4 技能の修得ではなく、目的別の語学修得（個人にとって必要な外国語、4 技能のうち必要な技能）の必要性が示されている。4 技能の修得には短期集中の学習が必要とされている（カナダの研究によれば、10～11 歳の生徒の場合、ある程度の自然口頭によるコミュニケーション能力の修得には、270 時間の集中学習を要するとされている）。本学では、就職

試験や公務員試験の英語対策や、心理学部の原書講読力を身につけるというニーズもある。たとえば公務員試験の英語は、センター試験のレベルに相当するが、それに対応できる語彙や文法を身につけることに加え、ある程度のまとまった長文を読んで理解できる力が必要である。本学オリジナルの教科書では、そのような学生の目的にも配慮した、目的別学習を可能とした内容構成を検討したい。

IV. 教科書の分析

本学オリジナルの教科書作成に向けて、他大学で使用されている教科書を概観した。その対象は、それぞれの大学教員が、その学生の英語力向上を目的とし、日本人教員とネイティブ教員の連携を進める構成になっているもの、そして大学や地域の特徴が内容に含まれているといった大学オリジナルのものであるが、管見の限り見当たらなかった。

しかし、大学に所属する英語教員を中心に作成した教科書や、一般の出版社で発行している教科書に、大学名を入れ、表紙に大学の写真を入れたもの、新入生用に英語の学習の仕方を説明するもの、留学や資格試験、英語圏の文化情報等をまとめた副読本などがあり、それらから学ぶべき点も多かった。

4.1 大学オリジナルの教科書概観

以下は、分析した各大学の共通教育または一部の学部で使用されている教科書である。

(1) A 大学の例

大学向け語学教科書を出版している出版社の、英語で書かれた市販の教科書を使用。その表紙にはその大学名を入れ、表紙の写真はその大学構内の様子になっている。大学名が入っていない、一般向けに販売されている版にはない、その大学の学生向けの英語学習に向けた心得が、教科書の始めに記されている。また、その大学の指導方法に合わせた、学生向けの指示が各ページに加筆されている。

(2) B 大学の例

B 大学では、授業用教科書は日本人教員、ネイティブ教員がそれぞれ選んだ教科書で授業が行われてい

るが、全ての学生に配布される副読本もある。その大学の複数の教員によって作成されたもので、授業中の使用は義務づけられていない。その内容は英語の学習方法、文法に関する説明、英語や英語圏の文化や歴史、留学や検定試験情報など、学生に役立つ情報が多く含まれている。

(3) C 大学の例

C 大学では、A 大学同様の大手の出版社の教科書を利用している。執筆者の多くはその大学の英語教員である。その大学以外の誰でも購入できる一般向けの教科書で、各章に一つずつトピックがあり、それについての動画、語彙や要約の確認、文法練習等、4 技能の修得を意図した構成になっている。

本研究プロジェクトでは英語 I と英語 II を関連付け、日本人教員とネイティブ教員の授業を一冊の教科書で連携する構成を検討している。ただ、本学は専任、非常勤の複数の教員が英語教育に従事しており、また習熟度別のクラス編成を行っているため、共通教科書の導入は容易ではない。また、共通教科書を使用する点については長所も短所もあるため、本プロジェクトで作成する教科書は、副教材の形を視野に入れて検討したいと考えている。

なお、本学用の教科書で取り入れたい内容は次の節で述べたい。

4.2 本学オリジナルの教科書の内容について

次年度は、学生の英語力や教科書等の分析結果を反映させた教科書の原案を作成していくが、その際に教科書に入れたいと考える内容は以下の通りである。

(1) 学習方法や辞書の使い方の説明

新年度や学期の最初のオリエンテーションで、授業内と自宅での具体的な学習方法や辞書の使い方等の説明を行っている。しかし、各教員によって授業内容が異なるため、本学の指導方針に沿ったもので、本学の学生に最低限伝えてほしい学習方法や心得などをまとめたものがあれば、教員にも学生にも有効

である。また、冊子や副読本の形であれば保存しやすく、授業内でも活用しやすい。

(2) 毎回の授業でポートフォリオを作成する

授業ごとに学習内容を振り返るページを設ける。その日に学習した内容や、自分がどこまで理解できたのかを確認するフィードバックの時間があれば、毎回の授業後の達成感が得られ、学習内容の視覚化ができる。ポートフォリオ形式は、学習の積み重ねが学生の理解を促進し、学習の動機付けにつながる可能性があること、この課題の提出を通じて、教員が学生の理解度を把握し、次回のフィードバックや学生とのコミュニケーションにも生かせるといった長所がある。

(3) 副教材というスタイルについて

これまでグローバル教育センターでは、英語 I と英語 III で英語構文の冊子を用意し、教員に使用を推奨している。しかし、その内容は構文だけで、学生が自ら手に取って読みたくなるような副読本とはいえない。本プロジェクトで念頭に置いている教科書は、英語 I で学習した文法事項を、英語 II で実践練習できるような内容構成にすることである。また、英語 I と英語 II が連携可能な内容にし、文法説明だけでなく、学習方法の紹介や、英語の豆知識、留学情報、就職試験（公務員試験の英語試験情報）や TOEIC や英検などの資格試験の内容が含まれた、有益で、読み物としても楽しめる内容も検討したい。

(4) 本学学生の出演するビデオを制作する

本学の留学制度を利用して留学した学生と、海外からの留学生に協力してもらい、教材の英語表現を使った会話のビデオを制作する。本学のキャンパスで学生が出演する様子は、学生に英語への親しみを持ってもらうきっかけになり、自分と同じ大学生が英語を話す様子に、自分にもできるかもしれないという積極的な気持ちを持ってもらうことが期待される。また、本学の英語教育の宣伝にも利用できる。動画では、学習者が役になりきってビデオ内の学生と話すロールプレイングを取り入れ、楽しく練習で

きる内容を検討したい。

(5) 英語 I と英語 II の連携について

教員の人数や学生数を考慮すると、英語 I と英語 II の連携を徹底させることは容易ではない。シラバス通りに授業を進めるとはいえ、学生の様子次第で授業の進度も変わるため、連携がどこまで可能か、また、どのような方法で連携を効率的に行っていけばよいかなどについて、今後の検討課題としたい。

(6) 指導すべき内容を精査する

昨今の学生は、コミュニケーション重視の教科書で、日常的な会話練習のような内容を学習してきている傾向があり、練習の時間も圧倒的に少ない。英語力の向上には、まとまった文章を何度も読むことが必要である。また、リスニング力は日常的に英語を聞くこと、音読することなどのトレーニングが必要であるが、このようなトレーニングも不足していることが推測される。

ただ、限られた授業時間内で一クラス 30 人もの学生に指導する場合、全ての学生に行き届いた指導は難しい。多くの文法事項を教えるより、内容を精査し、繰り返し指導することで、定着させるための練習量が確保できると考えられる。

V. 研究成果の普及・活用方法

5.1 副読本を作成し、英語 I, 英語 II で使用する

次年度は今年度の分析結果を生かした原案を作成する。原案は本プロジェクトの担当教員が実際の授業で試用してみる。

5.2 本学の英語教育の宣伝にも活用する

章立てや具体的な内容は次年度のプロジェクトで検討を進めていく。本学の学生が出演するビデオや、本学や地域の特徴を盛り込んだ内容にすることで、本学の英語教育の宣伝も狙っていききたい。

VI. まとめ

本研究プロジェクトでは、本学の学生の英語力向上に効果的な本学オリジナルの教科書作成を目指し、

クラス分け試験や英語教員のアンケート、他大学の教科書の分析を行った。

学生の英語力を分析し、既存の教科書の内容を見直した結果、英語教育で扱う内容についても様々な課題が明らかになった。単位のために不本意に英語を履修したが、結局何も身につけていなかったというのではなく、少しでも英語嫌いを解消し、英語力を身につけることや、目的別の英語力養成を目指すなど、本学ならではの英語教育を実現したい。

次年度のプロジェクトでは、今回の分析結果を反映させた教科書作成、会話シーンの撮影、英語 I と英語 II の連携方法の検討などを予定している。

¹⁾ 英語運用能力評価協会 (ELPA) とは、2003 年に東京都知事の認証を得て設立された特定非営利活動法人 (NPO) である。「生徒・学生の英語運用能力を評価するテストを開発・実施し、評価結果とそれにもとづく分析結果を学校や自治体、先生、研究者にフィードバックすること」で、日本の英語教育の現場に対して新しい指導法や学習方法の提言を行っている。npo-elpa.org (閲覧日: 2019 年 3 月 1 日)

参考文献

西山教行, 大木充 (編著) (2015) 「第 5 章 カナダにおける早期言語教育 イマージョンと ANL」『世界と日本の小学校の英語教育 早期外国語教育は必要か』明石書店.